

成人・老年看護学実習Ⅰ

I 実習目的

成人期・老年期で急性期や回復期にある対象とその家族を理解し、生命の危機および健康状態の変化からの身体的・精神的回復や、疾患や障害によって変化した社会生活への適応を図る看護を実践するための基礎能力を修得する

II 実習目標

- 1 成人期・老年期で急性期や回復期にある対象とその家族の特徴を理解する
- 2 急性期・回復期にある対象の健康障害における反応を統合的に分析し、看護問題を明確化する
- 3 急性期・回復期にある対象の健康状態の変化を予測しながら早期回復を促進するための計画を立案し実施する
- 4 疾患や障害による健康状態の変化から、対象が社会生活に適応するための援助のあり方を理解する
- 5 救急医療を必要とする対象の特徴と看護の役割を理解する
- 6 実習を通して、倫理的な態度と言動を示す

III 実習構成

1 単位と時間数

2単位 （総時間数 80 時間）

2 実習構成内容・実習場所・実習時間

実習構成内容	実習場所	実習時間
オリエンテーション	新潟県立十日町看護専門学校	3 H
急性期・回復期にある対象とその家族の理解と看護	新潟県立十日町病院 新潟大学地域医療教育センター魚沼基幹病院	63 H
救急医療を必要とする対象の看護	新潟大学地域医療教育センター魚沼基幹病院 (地域救命救急センター・救急外来)	14 H

IV 実習内容

実習目標・行動目標	実習内容
1 成人期・老年期で急性期や回復期にある対象とその家族の特徴を理解する (1) 対象の発達段階をふまえて生活状況の変化・健康維持に関する情報を収集する (2) 対象の身体・精神・社会的特徴を述べる (3) 病気の受け止め方やキーパーソンに関する情報を収集する	①対象の発達段階と発達課題 ②患者の背景 生活状況 ③対象の健康維持の特徴 ・対象の健康管理方法、生活習慣、健康行動、生活リズム ④対象の身体的特徴 ・外観、運動能力や体力の変化 ⑤対象の精神的・社会的特徴 ・対象の価値観、信念、生きがい、趣味、信仰 ・職業、住居環境、医療保険、仕事や家庭、地域での役割 ⑥対象とその家族の病気、入院、治療の受け止め方 ・対象の家族への思い、家族の対象への思い ・家族構成、キーパーソン ・検査・術前オリエンテーションの内容
2 急性期・回復期にある対象の健康障害における反応を統合的に分析し、看護問題を明確にする (1) 健康障害により生じている対象の器質的変化、機能障害、症状について解剖生理を踏まえて説明する (2) 健康障害が対象の身体的・精神的・社会的側面に及ぼす影響を説明する (3) 健康障害が対象の日常生活に及ぼす影響を説明する (4) 健康状態の変化に伴う対象とその家族の心理的葛藤や不安、適応状態を説明する (5) 疾病および治療による生体の変化・反応を、異常の早期発見・合併症の予防につなげて説明する (6) アセスメントの結果から対象の看護問題を抽出する	①健康障害に伴う病態生理や機能障害のメカニズム ・診断名、既往歴、現在の症状、初期症状からの経過、検査・治療・処置・手術の内容 ②対象の身体的側面に及ぼす影響 ・モニタリングとフィジカルアセスメント ・検査データ ・侵襲刺激に対する生体反応（呼吸障害、循環障害、脳・神経障害、痛み、せん妄、代謝障害） ・合併症の有無、予測される合併症、二次的障害 ③対象の精神的側面に及ぼす影響 ・対象の価値観、信念、生きがい、信仰、患者の家族に対する思い、病気の受け止め方 ④対象の社会的側面に及ぼす影響 ・対象の社会的役割（職業、住居環境、家族構成、医療保険、趣味、仕事や家庭、地域での役割） ⑤健康障害が日常生活に及ぼす影響 ・食事、排泄、清潔、移動、睡眠 ・安全・安楽面、自立度 ⑥対象とその家族の心理的葛藤や不安、適応状態 ・予期せぬ事態に対しての戸惑い、死への恐怖・不安 ・検査・手術に対する不安

	・自己概念、ボディイメージの変化 ・ストレス・コーピング、危機モデル ・対処能力 ⑥検査・手術の見学 ・検査・手術の目的、内容 ・体位（良肢位、神経障害・皮膚障害への対策） ・バイタルサインの変化、呼吸・循環状態の観察 ⑦対象の思い、希望 ・生命の危機への不安 ・治療・処置による心身の制約 ⑧対象の看護問題の優先度の決定 ・身体侵襲の影響 社会的役割変化 日常生活の変化 合併症のリスク セルフケア／セルフマネジメント ⑨優先される看護問題の根拠の分析 ・問題の原因・誘因 問題のなり行き 看護の方向性
3 急性期・回復期にある対象の健康状態の変化を予測しながら早期回復を促進するための個別的な計画を立案し実施する （１）対象の個別性に合わせた達成可能で具体的な看護目標を表現する （２）対象の回復過程を踏まえた計画を具体的に表現する （３）日常の看護を合併症の予防、回復の促進とつなげて説明できる （４）援助を実施するにあたり、その日の対象の状況に応じた援助内容について述べる （５）対象の反応を確認しながら安全・安楽に配慮した援助を実施する （６）疾患や治療による不安や苦痛に配慮した援助を実施する （７）対象の状態の変化を捉え、随時計画の修正ができる （８）実施した援助について対象の反応を踏まえて自己の援助を評価する	①RUMBAの法則に基づいた看護目標 ②対象の個別性に合わせた具体策 ・具体的かつ実践可能な計画 ・対象の個別性、強み、安全性、安楽性 ・合併症のリスク ・家庭的、社会的役割の変化 ・ボディイメージの受容、機能訓練 ・セルフケア／セルフマネジメント ③その日の対象の状況に合わせた援助内容 ・対象の回復状況 ・対象の状態（バイタルサイン、身体的苦痛の有無・程度、症状悪化の有無、合併症の徴候、言動や表情、訴え、態度、反応、睡眠・休息の状況） ・フィジカルアセスメント ・不安内容の把握と程度 ④対象の回復過程を踏まえた援助の実施 ・対象の苦痛、安静度、ADL、自立度、知識、理解度 ・生命の危機や治療・処置に対する不安の有無、内容 ・モニター・ドレーン管理、創処置、安全管理 ・輸液管理・呼吸管理・疼痛管理・栄養管理 ・合併症、二次障害の予防

	・対象の羞恥心、安全、安楽、自立、個別性への配慮 ・セルフケア能力の把握、日常生活指導 ・侵襲下にある患者の特徴 ⑤対処能力を引き出す関わり ・対象の言動、表情の観察 ・対象の変化のフィードバックと努力の承認 ⑥対象へ実施した援助の評価・修正 ・援助実施前・中・後の対象とその家族の反応 ・看護実践の評価（目標・方法・達成度等） ・対象の状態に合わせた看護計画の修正
4 疾患や障害による健康状態の変化から、対象が社会生活に適応するための援助のあり方を理解する （１）対象の価値観や信念、ライフスタイルに対する思いを社会生活への適応の視点で述べる （２）対象にとっての自立・自律した社会生活に適応するための必要な支援を述べる	①疾病や治療による対象の変化 ・身体的、精神的、社会的変化 ・対象のライフスタイル ・自己概念、ボディーイメージ ・変化による日常生活への影響 ②対象の状況 ・対象・家族の信念、価値観、 ・対象にとっての望ましい状態、セルフケア能力 ・対象・家族の対処能力、療養の場への適応 ・退院への不安と生活状況の把握 ・ストレス・コーピング、適応状態 ・キーパーソンの把握、家族や周囲の人との協力体制 ・リハビリテーション ・症状マネジメント ③社会資源の活用 ・インフォームドコンセント、意思決定支援 ・対象の自己効力感 主体的な治療へ参画 ・フォーマルサービス／インフォーマルサービス ④カンファレンステーマ「対象の健康状態の変化が社会生活に及ぼす影響および自立・自律した社会生活に適応するための支援」
5 救急医療を必要とする対象の特徴と看護の役割を理解する （１）地域救命救急センターおよび救急外来の機能と役割を説明する （２）地域救命救急センターおよび救急外来における看護の役割を説明する	①救急医療体制と役割の理解 ・初期救急・二次救急・三次救急医療施設機能と役割 ・救急医療における ICT システムの活用（うおぬま・米ネット） ・施設内とドクターヘリの見学

(3) クリティカルケアの実際を通して救急医療を必要とする対象における看護師の臨床判断について説明する	(※ドクターヘリは状況により見学できないこともある) ・クリティカルケアの実際 治療・処置の見学 ②クリティカルな状態にある患者の特徴 ・身体的・心理的・社会的特徴 ・家族の心理・社会的特徴と看護 ・危機モデル ③地域救命救急センターおよび救急外来の看護の役割 ・突然の発症に伴う患者や家族の心理と看護 ・生命維持、生理機能回復のための全身管理 ・重篤な状態にある患者の安全・安楽を考えた日常生活の援助 ・コンフォートケア ・合併症の観察・予防 ・セルフケア能力回復への看護 ・倫理的課題 対象への尊厳 ・多職種連携 ④クリティカルケア看護における看護師の思考 ・気づき・解釈／対象の理解／観察の視点 モニタリング／フィジカルイグザミネーション フィジカルアセスメント ・反応／反応の根拠
6 実習を通して、倫理的な態度と言動を示す (1) 他者からの意見や助言を受け止め、自己の態度と言動で示す (2) 自己の課題解決に向けた学習に対する姿勢を示す (3) 実習での経験を踏まえながら、自己の学びを示す	① 看護職の倫理綱領 ② 身だしなみを整える ③ 教員、スタッフ、患者とのコミュニケーション ④ 相手に対する思いやり、配慮、言動 ⑤ 意見や助言を謙虚に聴く姿勢 ⑥ 自己の行動の振り返り ⑦ カンファレンスに臨む姿勢 ⑧ カンファレンステーマに沿った意見交換 ⑨ 報告・連絡・相談 ⑩ 計画的な看護技術の経験 ⑪ 主体的な学習、追加学習 ⑫ 学習した知識の活用 ⑬ 心身の健康管理 ⑭ テーマに沿ったレポート ・急性期・回復期の対象とその家族への看護 ・チーム医療 ・保健・医療・福祉チームの一員としての看護師の役割 ⑮ 看護理論の活用

V 実習配置

別紙参照

VI 実習方法

1 病棟実習

- 1) 受け持ち患者 1 名を選定し、成人・老年看護のプロセスに沿って看護を展開する
- 2) 受け持ち患者の状況：成人期または老年期で、原則として急性期・回復期にある対象とする

2 地域救命救急センター・救急外来実習

- 1) 受け持ち患者を選定せずに看護師の指導のもとで実習を行う

VII 実習記録

- 1 実習評価表（成人・老年Ⅰ 様式 1）
- 2 学修成果レポート（成人・老年Ⅰ 様式 2）
- 3 アセスメントシートⅠ（共通 様式 A）
- 4 全体像（共通様式 B）
- 5 アセスメントⅡ（共通 様式 C）
- 6 看護計画シート（共通 様式 D）
- 7 看護の評価（共通 様式 E）
- 8 毎日の実習記録 看護計画立案前（共通 様式 F－①）
- 9 毎日の実習記録 看護計画立案後（共通 様式 F－②）
- 10 地域救命救急センター・救急外来 実習記録（成人・老年Ⅰ 様式 3－①）
- 11 救急医療における看護の役割（成人・老年Ⅰ 様式 3－②）
- 12 事前学習・追加学習
- 13 受け持ち患者の手術見学依頼・手術室見学における学修成果レポート *手術室見学実習を行った学生のみ

VIII 実習評価

最終評価は、評価表に基づき担当教員が評価する